

## 「食」に関する母親の実態調査

○加藤 陽子<sup>1)</sup>、吉田 一恵<sup>1)</sup>、岡 暁子<sup>2)</sup>

- 1) かとう小児歯科 (福岡市)
- 2) 福岡歯科大学 生体構造学講座 機能構造学分野

**【目的】** 当院では、3年程前より定期健診を利用した継続的食育支援に取り組んでいる。その一部は「当院における食育支援のすすめ方」として、第48回日本小児歯科学会大会総会にて報告した。今回、食に関する母親の実態を調査する目的で行った第一弾アンケートについて分析を加えるとともに、第二弾アンケートを実施したので報告する。

**【方法】** 第一弾アンケートは、当院を受診した1歳から10歳の子どもを持つ母親863名を対象に、「食育への意識」「食に関する生活実態」など21項目について調査した。第二弾アンケートは、137名の母親を対象に「食事の内容」「食事の取り方」など22項目について調査した。

**【結果】**

1. 母親の食育への高い関心、具体的な悩みについての分析は、第48回日本小児歯科学会大会総会にて報告した。
2. 「生活実態」については、早起き・朝ごはんは高い割合で実行されていた。就寝時間は、22時以降である乳幼児が30%以上で、就学前後にその割合は減少するものの、8歳以降から増加し10歳児では42%を占めていた。そこで、夕ごはんの時間帯や、夕ごはんから就寝までの間食の習慣などについても検討した。
3. 「食事の内容」については61%に偏食が見られ、嫌いな食べ物としては、レバーなど母と子に同傾向を示すものがあった。歯ごたえのある食品を取り入れている母親は、半数以下であり、また、48%の子供に歯ごたえを好まない傾向がみられた。
4. 「食事の取り方」の悩みとして、遊び食べが最も多く、丸のみも23%見られた。自由記載による悩みは多岐に渡っており、これらについても解析を行った。

**【考察】** 2回のアンケートを通して、「食」に関する母親の実態を知ることができた。これらの結果をふまえ、生活実態にも配慮しながらニーズに沿った食育支援を今後も展開していきたい。

青少年期における1歯欠損症例への対応 (I)  
人工歯付きリングルアーチとノンクラスプデンチャー○細矢 由美子<sup>1)</sup>、勝山博文<sup>2)</sup>、藤原 卓<sup>1)</sup>

- 1) 長大・院・小児歯、2) 勝山歯科医院

近年、国民の美意識に変化がみられ、歯の審美性に対しても関心が高まっている。一方、小児化と齲蝕の減少に伴い、小児歯科で扱う患者の年齢と処置内容にも変化がみられるようになってきた。演者は、青少年期の接着ブリッジ、歯の漂白や歯のマニキュアなど、発育審美歯科領域の処置を他に先駆けて発表してきた。

ところで、永久歯の1歯欠損症例に対する処置法としては、歯列矯正、インプラント、ブリッジ、局部義歯が一般的である。歯列・咬合が発育中である青少年期における先天欠如や外傷などによる1歯(あるいは2歯)欠損症例に対しては、いかなる処置がなされているのであろうか?

今回は、かような症例に対し、人工歯付きリングルアーチもしくはノンクラスプデンチャーを用いた症例を提示する。  
<人工歯付きリングルアーチ>

[症例1]; 生後3か月時に下顎両側乳中切歯の先天歯で来院後中断。7歳1か月時に下顎両側中切歯の先天欠如で再度来院。矯正処置は拒否。下顎両側乳中切歯脱落后に同部位をリングルアーチ(LA)で保障。12歳10か月時に人工歯1歯付き(下顎中切歯)のLAに交換。16歳2か月時に1歯欠損補綴の形で接着ブリッジを装着。

[症例2]; 初診時年齢2歳10か月。上顎左側側切歯が先天欠如。乳歯列の反対咬合に対し、Bimler Adapter Type C, 上顎拡大床、Chin Capを使用したが、装置の破損もしくは紛失を繰り返す。齲蝕活性度は低い。混合歯列期における先天欠如部位の空隙管理にはLAを使用。13歳8か月時に欠如部に人工歯付きLAを装着。大学進学後にインプラントあるいは接着ブリッジによる補綴処置の予定。

<ノンクラスプデンチャー>

[症例1]; 上顎左側犬歯が先天欠如。咬合関係は1級。他院にて矯正処置の既往有り。17歳9か月時に先行乳歯の脱落部にバルプラスト(スーパーポリアミド系)によるノンクラスプデンチャーを装着。

[症例2]; 上顎左側乳中切歯と乳側切歯を交通事故の外傷により喪失。咬合関係は軽度2級。5歳1か月時に喪失部位にバルプラストで製作したノンクラスプデンチャーを装着。